『いつか、ひとやすみ。』

遠藤雷太

■登場人物

・三木本皐月（みきもとさつき）弦崎東総合病院の患者。同病院の調理師でもある。久米尚次の妻。三木本は旧姓。
・佐藤誠人（さとうまこと）患者。保健所勤務。皐月の不倫相手。
・設楽遊太（したらゆうた）患者。八百屋。皐月と誠人の共通の知り合い。
・久米尚次（くめなおつぐ）看護師。皐月の夫。
・石上正樹（いしがみまさき）医師。津村可奈の元夫。
・津村可奈（つむらかな）患者。石上の元妻。
・片岡素子（かたおかもとこ）看護師。
・佐藤亜子（さとうあこ）誠人の妻。
・須藤司　（すどうつかさ）亜子に雇われた探偵。

ある夏の日の午後。

弦崎東総合病院の812号室と712号室。

舞台上には四つのベッド。それぞれのベッドにはカーテンが取り付けられている。
上手側の二つのベッドは712号室、下手側の二つは812号室。
舞台奥にスライド式のドア（二部屋共通）。開くと廊下が見える。

（部屋割）

■712号室（男子部屋）　上奥…遊太　上前…誠人
最初、遊太は不在。誠人が携帯電話をいじっている。

■812号室（女子部屋）　下奥…可奈　下前…皐月
皐月もこっそり携帯電話をいじっている。

【812号室】
下手前のベッドに三木本皐月。
下手奥に石上可奈。

皐月　（ケータイでメール作成中）
可奈　ねーえ？
皐月　はい！？（携帯電話を隠す）
可奈　だいぶ顔色よくなってきたんじゃない。
皐月　そうですかね。
可奈　ここに入ってきたとき、真っ白だったからさ。真っ白。
皐月　ご心配をおかけしたみたいで…。
可奈　見違えるようだわ。うん。見違える。
皐月　おかげさまで。
可奈　飴なめる？（飴を取り出して）
皐月　いえ。
可奈　超やわらかいよ。
皐月　（苦笑い）…すみません。
可奈　あ、じゃまだったら寝ててもいいのよ。
皐月　いえ…大丈夫です…。
可奈　そう？　わたし、ひまなのよ。ひま。休憩所、オバちゃんばっかりだし。
皐月　そうですよね…。
可奈　だから、あなたが来てくれて嬉しいのよ。あの人、気を使ってくれたのかしらね。
皐月　あのひと？
可奈　いや、それはいいんだけどさあ。ま、なにもないけど、ゆっくりしていってね。
皐月　そういうわけには…。
可奈　あなたがよくなるのを待ってたの！　ずっーと！　二日も！
皐月　はあ。
可奈　私はほら肺だから大したことないんだけどさ、いや、大したことあるから入院してるんだけどさ、大したことあるってほど大したことないのよねえー。
皐月　はあ…。
可奈　こわいわねー。貝にあたったっていうからカキだと思ったんだけど、ホタテでしょ。
　あたし、ホタテって、おいしいイメージしかないわ。
皐月　普通そうですよね。
可奈　なんだかおなかすいてきたなー。
皐月　この話の流れで…？
可奈　なあに？
皐月　いえ…。
可奈　ごはんもおいしくないのよね。病院食っていうの？

712号室で、誠人が携帯電話をいじりだす。

皐月　すみません。
可奈　なんであなたがあやまるの。
皐月　私、調理師なんです。この病院の。
可奈　…え。あれ？！　調理師が、ホタテにあたって入院したの！？
皐月　大きい声で言わないでください。
可奈　そりゃそうよね！　ごめん！
皐月　…。
可奈　怒った？
皐月　（隠していた携帯電話が鳴る）あ。
可奈　なに、ケータイ？！
皐月　あ、すみません。電源切っておきます。
可奈　いいのよいいのよ！　出て。どうせ誰も来ないから。
皐月　でも、
可奈　いいから。どうせこの時間、誰も来ないから！

石上医師が入ってくる。

石上　どおー？
皐月　…！（びっくりしてケータイを隠す）
可奈　なに！？
石上　なにってなによ。
可奈　いま、回診の時間じゃないでしょ。
石上　その前に俺、担当医じゃねえし。
可奈　ほんとに何しに来たの？
石上　いいじゃない。回診じゃなくたってさ。
可奈　非常識よ。
石上　医者が病室に入るのは普通だろう？
可奈　担当医ならね。
石上　あれ？（皐月に）前からいらっしゃいましたっけ？
皐月　一昨日からです。
石上　あそう。初めまして。医師の石上です。
皐月　はあ。存じ上げております。
石上　え？
皐月　このひと、ここの調理師さん。
石上　わかった！　調理師なのにホタテにあたった人だ。
可奈　ちょっと非常識よ！
皐月　はい、その調理師です。
石上　そうそう、三木本皐月さんだ。ま、大したことなくてよかったじゃない。（可奈に）よかったな、話し相手ができて。

可奈　気軽に話しかけないで。
皐月　すぐ退院しますから…。

712号室の誠人がまたメールをおくる。

皐月　（メール着信にびっくりする）
可奈　（皐月のケータイに気づいて）もういいから仕事しなさいよ！
石上　なに怒ってるんだよ。
可奈　はやく！　用事ないんでしょ。
石上　じゃあ。あとで談話室にきてよ。ね。
可奈　わかったから。行って。もう！
石上　よろしく！

石上、退室。

皐月　石上先生と、仲がいいんですか？
可奈　悪いわよ。
皐月　でも…。
可奈　離婚したのよ。
皐月　ああ…。
可奈　ごめんね。悪い人じゃないんだけど。
皐月　でも未練丸出しでしたね。
可奈　ね。うっとうしい。
皐月　でも、
可奈　あ。さっきのケータイって、誰から？
皐月　え、大したメールじゃないですよ。
可奈　えー、ほんと？　じゃあ、相手が男か女かだけ教えてよ。
皐月　…男ですけど。
可奈　あれ。もしかしてあなた結婚してる？
皐月　…してますけど。
可奈　（がっかり）なーんだ。つまんない。
皐月　つまんないって。
可奈　あなたのトコだって、ちゃんとメールとか送ってくれるんだ。…違うの？
皐月　（苦笑い）ええ、まあ。そんな感じで。
可奈　あ、返信しなきゃ。今度こそ誰も来ないから、思う存分メールうってて。
皐月　そうさせてもらいます。

看護師の久米、入ってくる。

久米　失礼します。（可奈に）あ、どうも。さっき石上先生とすれ違いましたよ。

可奈　何か言ってた？
久米　何も。ただ、肩を落として泣いてました。
可奈　えっ…。
久米　冗談です。
可奈　なにそれー。
久米　（皐月に）どうだ、調子は？
皐月　（携帯電話を隠して）ふつう。でも、だいぶよくなった。
久米　ムリしなくていいんだぞ。
皐月　でも、もうそろそろ退院でしょ？
久米　まあ、先生もそう言ってるけどな。
皐月　じゃあ、明日にでも。
久米　せっかくだからもう少し休んだら？
皐月　そういうわけにはいかないよ。
久米　っていうかさ、おまえはムリに仕事続けなくてもいいと思うんだ。
皐月　うち、そこまで余裕ないじゃん。
久米　でも…。
皐月　なに？
久米　なかなか会えないしさ。
皐月　こんなところでそんな話しないで。
久米　でも、こんな時でもないと。
皐月　（ケータイがまたメールを受信する）
久米　おまえ。
皐月　なによ。（音を止める）
久米　…おまえさ、病室でケータイ使うなって言ったよな。
皐月　でも、可奈さんがいいって言ってくれたし。
久米　規則は規則だからさ。
可奈　そういう言い方はどうかなあ。
久米　え？
可奈　久米先生だったんだ。旦那さん。
久米　看護師ですけど。
可奈　だってそうでしょ？　ねえ。ケータイって言うけど…。あ！　じゃあ、あなたたち職場結婚？
皐月　はあ。
可奈　そうなんだー。やるわねー。じゃあ、三木本って何？　旧姓？
皐月　そうですけど…。
久米　あの、何か気に障りましたか？
可奈　だから、自分でメール送っておいて、それを見るなって変じゃない。規則守るんだったら、わざわざ下の階まで降りていって見ろってこと？　ここ八階よ。
久米　え？
可奈　…っていうかさ、八階ってなに？　エレベーターも待つしさ。もう少しさ、下の階

に移れないの？
久米　自分、何も送ってませんけど。
可奈　え？　でも男の人からって。そういうことでしょ。（皐月を見る）あ！
皐月　…。（表情が引きつる）
久米　誰と連絡とってたんだ？
可奈　（勝手に焦って）あの！　いや、でも、　あのね。よく聞いて。男の人からって言ったって、ほら、いろんな男の人がいるでしょ。お父さんだって、向かいのお弁当屋さんだって。ほらー。あ、なんだか、お弁当の話をしたら、急に唐揚げを食べたくなってきちゃった。ちょっと歩いてくる。外出許可いる？
久米　…ナースステーションに必ず声をかけてください。
可奈　わかった。じゃあね。お邪魔虫は去るわね。じゃ！

可奈、わたわたと部屋の外へ逃げる。

久米　…誰と連絡とってたの？
皐月　なに疑ってるの？
久米　…いや。そういうわけじゃ。
皐月　そんなに信じられないなら、ケータイ見たら？（ケータイを差し出す）
久米　…いや。いい。
皐月　ふうん。…今日は、早番なの？
久米　準夜勤も。
皐月　うそ。昨日深夜勤だったんでしょ？
久米　いや。準夜勤だったんだけど、容態が急変した患者がいて。
皐月　あ、この前言ってた人？
久米　ああ。結局、お亡くなりになったよ。
皐月　そう…。
久米　まだ三十代だって。ヒトゴトじゃないよな。
皐月　ふうん。
久米　なんだよ。
皐月　情が移った？
久米　は？
皐月　美人だって言ってたよ。
久米　バカ。
皐月　さっきのお返し。
久米　…じゃあ、そろそろ行く。
皐月　がんばってね。
久米　（去り際に）皐月。
皐月　なに。
久米　皐月と同じ日に同じホタテにあたって、すぐ下の階に若い男が入院している。

712号室の誠人がくしゃみをする。

久米　…おまえと関係ないよな。
皐月　…関係ないよ。
久米　絶対だな。たまたま偶然そいつは…

また誠人がくしゃみをする。鼻をかむ。

久米　ホタテに、あたったんだよな。
皐月　…そうだよ。信じて。
久米　わかった。信じる。

久米、退室。

皐月　…会えないのは、誰のせいだ。（しばらく脱力。手元のマンガを読み始める）

【712号室】
上手前のベッドに誠人。（奥は設楽遊太のベッド）
看護士の片岡素子が入ってくる。

素子　佐藤さん！
誠人　はいっ！
素子　病室でケータイ使わないでください。
誠人　誰もいませんよ。
素子　決まりですから。
誠人　決まりって、どこならいいんですか。
素子　指定の場所で使ってください。
誠人　指定の場所って？
素子　五階の休憩スペースです。
誠人　ここ七階ですよ？
素子　そうですね。
誠人　（部屋の外を指差して）それに、みんな、そこの休憩所でも使っていますよ。
素子　規則は規則ですから。
誠人　毎回降りるのは面倒…。
素子　先に電源を切ってください。
誠人　はい。（電源を切る）
素子　見せてください。
誠人　はい。（ケータイを渡す）
素子　確かに。では、今後ケータイを使うときは、ナースステーションに言ってください。
（ケータイをポケットにしまう）

誠人　えっ？
素子　何度も注意しましたよね？
誠人　そんな！
素子　明日か明後日には退院できますからそれまでガマンしてください。責任をもって管理しますから。
誠人　えー…。
素子　では。
誠人　あの。
素子　なんですか？
誠人　三木本さんという人がここに入院しているはずなんだけど、知りませんか？
皐月　とっても嫌な予感がする。

812号室の皐月、ケータイをかける。

素子　…お知り合いですか？
誠人　ええ、まあ。
素子　三木本何さんですか？
誠人　三木本皐月です。
皐月　（留守電に）私です。私にメールとか電話とか絶対してこないで。お願いね。
素子　…女性ですか？
誠人　ええ、まあ。
素子　関係は？
誠人　えー、それ、言わないとダメですか。
素子　ええ。家族…ではないですよね。
誠人　そうですね。
素子　すみませんが、プレイバシーの問題もありますから。

遊太、入ってくる。

誠人　そうですか。
素子　いま、ケータイ使いますか。
誠人　（ふてくされて）…いいです。
素子　あ、設楽さん、浴室16時から使えますから。
遊太　ほんと？　ラッキー。

片岡素子、退室。

遊太　なんか険悪だったんじゃない？
誠人　看護師さんにケータイ取られちゃいましたよ。
遊太　ほら、言ったろ。ばかだねー。片岡ちゃんはそうなんだって。

誠人　元はと言えば遊太さんのせいでしょう。
遊太　ごめんね、応援するつもりだったんだけど。
誠人　ほんっと苦しかった。
遊太　ホタテは当たるとデカいんだよ。助っ人外国人みたいなもんでさ。
誠人　なんなんですか、それ（怒）。
遊太　でも、運が良かったよ。
誠人　え？
遊太　売りもんじゃなくて。
誠人　はあ？
遊太　まあ、俺が八百屋じゃなくて魚屋だったら、もう少し注意してたけどね。
誠人　ほんとに大丈夫ですか。３人、入院しているんですよ。
遊太　大丈夫でしょ。ひとりは俺だし（笑う）。
誠人　おまけとは言え、売り物と一緒に渡してるんですよ。
遊太　それは、そうだけど…。（不安になって）大丈夫だよね？
誠人　遊太さん、ボクの勤務先、知ってましたっけ？
遊太　いや。どこ？
誠人　保健所。
遊太　ええっ！
誠人　（名刺を出して渡す）よかったら。
遊太　マジかよ…。
誠人　確認しますが、この件に関して、ボクは一方的な被害者です。
遊太　は、はい…。
誠人　おかげで、ボクは彼女と一緒に入院するハメになった。
遊太　いや、あの、ほんと営業停止になったら困るんだけど。
誠人　そこまでは…。
雄太　お金で済むんなら、なんとかしますけど！？
誠人　そこまで求めてませんよ。ただ、少し反省してほしかっただけで。
遊太　いや、ほんとにごめん。でも、応援してたんだよ！　君たちのことは！
誠人　わかってますよ。
遊太　こういうことで仲良くなることもあるよ、きっと。
誠人　そんな都合よくいきませんよ。
遊太　それもわかるけどね。…よかったら、浴室先に使う？
誠人　いいですよ。
遊太　何かしてほしいことがあったら言ってね。
誠人　さつきさん。
遊太　えっ。
誠人　どの部屋にいるんだろう。
遊太　ああ。
誠人　…看護師さんも教えてくれないんです。
遊太　そっか…。片岡ちゃんじゃなあ。

誠人　会いたいなあ。

久米、入ってくる。

久米　失礼します。
遊太　あれ。看護師さん？
久米　はい。久米といいます。
遊太　担当替わったの？
久米　いえ。ちょっとお聞きしたいことが。
遊太　…あ！　それなら先にこっちも聞きたいことがあるんですよ。
久米　なんですか？
遊太　三木本皐月さんという人が入院しているはずなんですけど、何号室にいるか教えてもらえませんか。
久米　えっ…。（絶句）
遊太　いや、プライバシーとか色々あるんだろうけど、ぜんぜん俺ら怪しいものじゃないし、いいでしょ？　ね？
久米　あの、さつ…いや、彼女とどういう関係なんですか？
遊太　（答えに困る）いや、それはちょっと…。あはは。いいじゃない、ね？　大丈夫大丈夫。普通のお見舞いだから。
久米　（こぶしを握りしめながら）…わかりました。今、案内します。
遊太　あ、そこまでしてもらわなくても。部屋番号教えてもらえれば勝手に行きますから。
久米　いいんです。案内します。
遊太　忙しいんでしょ？
久米　いいんですよ！
遊太　（誠人に）…融通きくね。
久米　（遊太を見て）おまえか…。
遊太　えっ。
久米　いえ。なんでもないです。
遊太　あ、そういえば、看護師さんは何を聞きたかったの？
久米　もういいんです。
遊太　どうしたの、看護師さん、怒ってない？
久米　いえ。今から案内します。
遊太　ありがとう。（誠人に）じゃあ、行こう。
誠人　はい！
久米　えっ。
遊太　さ、行きましょう。
久米　（二人を見比べて）…どういうことだ？
遊太　えっ。
久米　あ、いえ。行きましょう。
遊太　よろしくお願いします。

久米　どうぞ。

三人、退室。

【812号室】

皐月　だめだ、（ケータイが）つながらない。（出て行こうとする）

片岡素子、入ってくる。

素子　皐月さん…！
皐月　わ、びっくりした。えっと。（携帯電話を隠す）
素子　看護師の片岡です。
皐月　あ、どうも。
素子　どうですか、入院生活は？
皐月　うん。まあまあかな。うん。あはは。
素子　ちゃんと休めてますか？
皐月　休めてるっていうか…ちょっと胃が痛いかな。
素子　なにかお薬頼みますか？
皐月　いや、私は大丈夫。それに、大丈夫？　あの子たち。
素子　（小声で）実は今日も配膳ミスが…。
皐月　マジで？
素子　ナスアレルギーの患者にナスを…。
皐月　あー。
素子　皆さん経験が浅いので、皐月さんがいないとなかなか…。
皐月　すぐ退院するからね。
素子　あ、すみません。無理しないでくださいね。ところで。
皐月　なに？
素子　佐藤誠人っていう人、知ってます？
皐月　えっ！？　…誰？
素子　佐藤誠人さんです。
皐月　（しばらく考えて）誰、それ？
素子　712号室の患者です。いきなり皐月さんの名前を出して部屋番号教えてくださいと。お知り合いじゃないんですか？
皐月　あ、えっと。…知らない。
素子　良かった。教えなくて。いえ、同じ症状で入院してる患者さんだから、お知り合いかと思ったんです。
皐月　偶然じゃないかな。
素子　そうなると皐月さんの名前を出してきたのが不気味です。何が目的でしょうか。
皐月　わからない。怖いね。

素子　実は先ほど、その人からケータイを取り上げたんです。（ケータイを取り出す）
皐月　えっ！
素子　…なんですか？
皐月　な、なんでもない。
素子　うまいことパスワードはずせば、素性がわかるかも…。
皐月　それはだめ！　絶対よくない！　人として！
素子　…そうですよね。わかりました。そのことだけ確認したかったんです。
皐月　わざわざありがとう。
素子　あと、久米さん、何かあったんですか？
皐月　えっ。
素子　最近、ちょっと荒れてるような。
皐月　え、そうなの。ごめんね。気を使わせちゃって。
素子　こういうこと言うのもどうかとは思いますが、結構、久米さんが結婚して悲しんでる人、多いんですよ。いまだに。
皐月　へー。あんなのが？
素子　（怒る）え？
皐月　（戸惑う）…え？
素子　だから、大事にしてあげてくださいね。
皐月　わかった…。
素子　では、失礼します。

素子、退室。

皐月　もおお！　なんにもわかってない！

久米、入ってくる。

久米　どうした、大声出して。
皐月　あ、いや。なんでもない…。
久米　痛むのか？
皐月　いや。
久米　そうか。よかったよ。
皐月　なに？
久米　会ってほしい人がいるんだ。
皐月　なに？
久米　心の準備はいいか。
皐月　なにが？
久米　どうぞ。

遊太だけが入ってくる。

皐月　（遊太を見て）あ。
遊太　どうも。
久米　やっぱり知り合いか…！
遊太　はい。
久米　よくもおまえ、ぬけぬけと！（近くの椅子を振り上げ、遊太を殴ろうとする）
皐月　（慌てて久米にしがみついて止める）
遊太　ええっ！　ちょっ、なにこの人！？
皐月　ちょっと待って！　なにか勘違いしてない？
久米　勘違い？　一緒に、ホタテに、どこが勘違いだ！？
皐月　そのひと、ただの八百屋さん。
久米　はあ？！
皐月　八百屋さん！
久米　…八百屋がなんで人の嫁に手を出してるんだ！？
遊太　出してないですよ！
久米　じゃあ、なんで同じ日に同じもの食べて入院してるんだ。
遊太　いや、意味が…。
皐月　その人がくれたんだよ。
久米　どういうことだ？
皐月　だから、まとめ買いしたら、おまけだって。
久米　そうなのか！？
遊太　すみません。知り合いの魚屋からもらったものだったんです。
久米　でも、さっき関係ないって。
皐月　八百屋さんまで一緒に入院してるなんて思わなかったから！
遊太　もうおすそわけしません、二度と！
久米　そうですか。（椅子をおろす）
遊太　あの、売り物じゃないんで、保健所には言わないでください。お願い…
久米　すみません！（深々と頭を下げる）
遊太　はあ！？
久米　勘違いしてました。
遊太　なにを？
久米　てっきり俺、皐月が浮気して…。
遊太　へ？
久米　勘違いでした。
皐月　騒ぎすぎ。
久米　ほんとうにすみませんでした。
遊太　え、い、いいよ。わかってくれたなら。
皐月　よりによって患者さんにつかみかかるってどういうこと？
久米　（猛省）…。
遊太　いや、いいんですよ。それより。あの、あなたは？

久米　え。
遊太　あの、どういうご関係で…？
久米　あ、すみません。皐月の夫です。
遊太　へえ。…（混乱）あれ？　…あれれ？
久米　どうしました？
遊太　あの、じゃあ、…あれ？
久米　そういえば、もう一人いましたよね。
遊太　えっと。
久米　彼はどうしたんですか。
遊太　…はぐれちゃったんですかね。
久米　彼はなんなんですか？
遊太　彼は…あ！（皐月を見る）
皐月　（「言ってはいけない」という意味で小刻みに首を横に振る）
久米　どうしました。
遊太　あの、えっと。あの…。
皐月　ねえねえ、誰かいたの？
久米　同じ部屋にもうひとりいたんだよ。一緒に来るはずだったんだけど。そうですよね。
遊太　ええ、まあ。
久米　たしか彼もホタテに…。
遊太　彼は、えっと。
皐月　それなら、その人もお客さんだったんでしょう？
遊太　そ、そうなんです。
久米　そうですか。
皐月　ほんと早とちりしすぎ！
久米　悪い。
遊太　じゃあ、俺はこの辺で…
久米　あの、皐月に用事があったんじゃないんですか？
遊太　え、俺が？　…俺が？
久米　はい。
皐月　ううう。（ベッドに倒れこむ）…お詫びの言葉が、まだなんだけど。
遊太　あ！　このたびは本当に申し訳ございませんでした。悪くなったホタテとは知らず、ご迷惑をおかけしました。（土下座する）
久米　そこまでしなくても…。
遊太　いえ、生鮮食材を扱う身でありながら、申し訳ございませんでした。
皐月　気にしないでください！
遊太　なんていい人なんだ！
久米　わかった。謝罪しにきてくれたんだ。
遊太　そうなんです。
皐月　わかった？
久米　だいたいは。

遊太　だいたい？
皐月　まだあるの？
久米　いや、さっきまでいた…お客さん。
遊太　誠人くん？
久米　どうしてただのお客さんが、あなたと一緒にここに来ようとしたんですか？
遊太　えっと…おれ、心細かったんです。
久米　でも、その人だって被害者でしょう？
遊太　そうなんですけど…。
皐月　それだけ仲がいいのよ。
久米　…いいお客さんがついてるんですね！
遊太　ありがとうございます。
皐月　解決した？
久米　うん。
皐月・遊太　よかった…。

ドア、開く。トレンチコート姿の須藤司が立っている。三人の様子を見つめ、ニヤリと笑う。カメラ付きケータイで三人の写真をパチリ。久米だけ気付く。

久米　何だ、今の。
皐月　えっ。
久米　いま、変なやつがのぞいてた。
遊太　誠人くんかな。
久米　いや。患者じゃない。ちょっと、見てくるわ。
皐月　気をつけてね。

久米、退室。

皐月　…寿命が縮む。
遊太　皐月さん。これどういうこと？
皐月　どうって…。誠人くんには、夫のこと内緒にしてね。
遊太　言えないよ、こんなこと。
皐月　ほんとに？　絶対？
遊太　絶対かって言われると困っちゃうけど。
皐月　（嘘泣き）もうどうしていいかわからない！
遊太　ちょっと、困るよ。誰か来たらどうするの！
皐月　だってこのことがバレたら、私、この病院にいられない！
遊太　わかったよ。絶対に言わない！
皐月　…絶対？
遊太　絶対。言わない。っていうか言えない。
皐月　誠人くんはどうしてる？

遊太　実は途中まで一緒だったんだけどはぐれちゃったみたい。
皐月　危ないところだったのね…。
遊太　連れてくる？（出て行こうとする）
皐月　待ってー！
遊太　え？
皐月　（遊太を近くに呼び寄せて。小声）あの、今どれだけ危険なことをしようとしたか、わかりますか？
遊太　え。
皐月　さっき、遊太さん、夫に何をされたか忘れたんですか？
遊太　あ。
皐月　遊太さんは誤解だったからあれで済んだんですよ。
遊太　あー。
皐月　わかりますよね。誠人くんのことバレたらどうなるか…。
遊太　確実に殴るね。殴られると思ったもん、俺。あ。でもここ病院だから大丈夫か。
皐月　なわけないでしょ。患者殴ったら、看護師クビになりますよ。そうなったら私だってここにいれないし、夫婦揃って、路頭に迷うことに…。
遊太　うわわ…。
皐月　理解してもらえましたか。
遊太　うん。
皐月　絶対ここに連れてきちゃダメですよ。
遊太　うん。じゃあ、俺、部屋に戻るわ。
皐月　くれぐれも、よろしくお願いします。
遊太　えらいことになったなあ…。

遊太、逃げるように部屋を出て行く。

【712号室】
誠人が考え事をしながら入ってくる。
続いて、石上も（あとをつけてきたらしい）入ってくる。

石上　佐藤さん、いらっしゃいますね。
誠人　あ、先生。どうしました？
石上　いま、お時間、大丈夫ですか。
誠人　…？　はい。
石上　大事なお話があるのですが。
誠人　え。
石上　心の準備はいいですか。
誠人　…なんですか？
石上　実は…17時から浴室を利用していいそうです！
誠人　えっ。

石上　おめでとうございます。
誠人　いや、ビックリさせないでくださいよ。何事かと思ったじゃないですか。
石上　よかったね。
誠人　こういうことって普通、看護師さんが言うもんでしょう？
石上　看護師が言いに来たら普通じゃないっすか。
誠人　先生、ヒマなんですか？
石上　家に帰ると、誰もいないんですよ。
誠人　知りませんよ。
石上　ところで、八階でなにしてたの？
誠人　え？
石上　いや、看護師から相談受けて。
誠人　そうですか。
石上　知ってると思うけど、八階は女の人だけだからさ。一人でうろうろされると目立つんだよ。
誠人　実は、人を探していて。
石上　へえ、お母さんでも入院しているの？
誠人　お母さんじゃないです…。
石上　家族？
誠人　いえ。
石上　じゃあ、誰よ。
誠人　そこは、…察してほしいんですけど。

遊太が戻ってくる。

石上　へえー。もしかして、コレ（小指を立てる）ですか？
誠人　ええ、まあ…！
石上　でも、八階にそれらしい人いたかなあ。年上？
誠人　はい。
石上　だれだ…？
遊太　実は…
石上　あ、待って！　俺、当てるから。
誠人　はあ。
石上　どちらかというとかわいいほう？　それともきれいなほう？
誠人　（ニヤニヤ）両方です。
石上　（ニヤニヤ）それじゃあ答えになってないよー。
誠人　まあ。
遊太　なんだ、この会話…。
石上　待って。年上ってことは三十代くらいでしょう。いたかな、そんな人。
誠人　もう言っていいですか。

このあたりで、812号室の皐月は財布を持って部屋を出て行く。

石上　森繁さん？
誠人　違います。
石上　じゃあ、黒柳さんだ？
誠人　誰ですか、それ。
石上　だめだ、検討もつかない。降参。
誠人　僕の好きな人は、三木本皐月さんです。
石上　えっ。でも、彼女は結婚…。
遊太　先生！（怒ったふり）
石上　わ、びっくりした。
遊太　人が誰を好きでもいいじゃないですか。
石上　いや、そうだけど？
遊太　この病院はそんなことまで話さなきゃ駄目なんですか？
石上　なんで？　ただの世間話じゃない。ね。
誠人　ええ。
石上　っていうか、あなたは？
遊太　誠人くんの友人です。
石上　そうなんだ。
遊太　だからそれ以上は…。
石上　（何かを察して）…あ。

石上、遊太を部屋の隅まで引っ張っていく。

石上　（小声）彼、知らないの、三木本さん結婚してるって？
遊太　（小声）…はい。
誠人　知らないって何ですか？
石上　（小声）「告知」してあげたほうがいいんじゃないの？
遊太　（小声）いえ。
石上　（小声）でも、彼もかわいそうだよ。
遊太　（小声）時期がきたら、話しますよ。だめですか？
石上　（小声）どうかな。三木本って旧姓で呼んでるところ見ると結構昔からだろ？
誠人　なんですか？
遊太　なんでもないよ。
誠人　本当ですか？
遊太　本当だよ。
誠人　さっき結婚っていいませんでした？
石上　いやいや、血行のよさげな美人だと言ったんです。
誠人　ほんとうですか。
石上　本当ですよ。ねえ。

遊太　俺にもそう聞こえたよ。血行、血行。
石上　あ！　そろそろ回診にまわらなきゃ。
誠人　先生。
石上　八階にはうまく言っておきますよ。個人名は出さないから安心してください。

石上、出て行く。

誠人　さっき何を話してたんですか？
遊太　何でもないよ。それよりさっきはびっくりしたよ、後ろ見たらいないんだもん。
誠人　すみません。
遊太　なんでいなくなったの？
誠人　いや、あの…。実はなんか急に怖くなっちゃって。
遊太　は？
誠人　だって、絶対ボク怒られるし。
遊太　なんで？
誠人　だって、皐月さん、魚介類好きじゃないのに、ボクがムリヤリ勧めたんですよ。
遊太　はあ。
誠人　だから、途中で、遊太さんに様子だけ見てもらえばいいかなって…。
遊太　さっきまであんなに会いたがってたじゃない！
誠人　そうなんだけど、実際会えるとなったら、急に心配になっちゃって。
遊太　へー…。
誠人　で、怒ってませんでしたか？
遊太　怒っては…いなかったね。
誠人　よかった。じゃあ、やっぱり行ってみようかなあ。
遊太　いやいや、すげえ怒ってたよ！
誠人　えっ。
遊太　会いに行っちゃダメだって。
誠人　…え？
遊太　怒ってなかったのは、最初だけ！　あとはずっと悪口言ってて怖かったもん。
誠人　ほんとですか？
遊太　ほんとほんと、俺なんか椅子でぶん殴られそうになったよ。
誠人　なんで遊太さんが…。
遊太　八つ当たりじゃないのかなあ？
誠人　なんか、すみません。
遊太　だから、会いに行かない方がいいよ。
誠人　でも。
遊太　退院してからにしなよ。悪いこと言わないから。
誠人　そうですか。（出て行こうとする）
遊太　どこ行くの？
誠人　売店ですよ？

遊太　じゃあ、ボクも。

誠人と遊太、出て行く。

【812号室】

可奈が、須藤を引っ張って、部屋の中に入ってくる。

可奈　早く！　早く！
須藤　な、なんですか？
可奈　いいからいいから！　座って！　こっち（ベッド）！　静かにしてね！
須藤　（可奈のベッドに乗る）
可奈　（カーテンを閉める）

久米、部屋に駆け込んでくる。

可奈　あれ、先生？
久米　看護師です。
可奈　どうしたの？
久米　さっき不審な男を見かけたんですが、知りませんか？
可奈　さあ。なにかあったの？
久米　いえ、今のところは。
可奈　心配性ね。大丈夫よ、きっと。
久米　だといいんですが。失礼しました。

久米、出て行く。

可奈　行ったよ。
須藤　（顔を出して）すみません。
可奈　助かった？
須藤　ありがとうございます。
可奈　どうしよっかな。飴、なめる？
須藤　いえ（困惑）。あの、どうして…
可奈　何から聞こうかなー。（お菓子を渡しながら）そうだなー。食べて食べてー。
須藤　はあ。
可奈　（小声）皐月ちゃんと付き合ってるんでしょ？
須藤　（むせる）
可奈　ちょっと大丈夫？
須藤　なぜそのような…。
可奈　だってさっき、この部屋のぞいてたじゃない。あたし、のぞいてるところ、そっから見ちゃったんだもん。ちゃんと見ちゃってたんだもん。

須藤　皐月ちゃんとは、三木本皐月…さんのことですか？
可奈　やっぱりわかってるんじゃない。
須藤　一応。
可奈　皐月ちゃん、もてるのねー。
須藤　あの、もう少しそのあたりの話を聞きたいのですが。

久米、また入ってくる。

可奈　（あわててカーテンを閉める）
久米　失礼します。
可奈　あ、先生。
久米　看護師ですって。
可奈　どうしたの？
久米　不審な男が入ってきたら、すぐにナースコールをお願いしますね。
可奈　わかってるって。
久米　失礼しました。

久米、出て行く。

可奈　（カーテンを開ける）どこまで話したっけ？
須藤　えっと。

石上、入ってくる。

須藤　（自分でカーテンを閉める）
可奈　なによ！
石上　なんだよ、そんなにあわてて。
可奈　いきなり入ってくるのやめて。びっくりするから。
石上　なかなか来てくれないからさ。コッチから来ちゃった。
可奈　だから、時間できたら行くって。
石上　時間なんか、いくらでもあるだろう。
可奈　忙しいのよ、こう見えても。
須藤　（お菓子の缶をひっくり返して派手な音を出してしまう）
石上　（恐る恐るカーテンを開ける）
須藤　…どうも。
石上　忙しいってそういうことだったのか…。
可奈　なにが？
石上　いや、もういいわ。
可奈　なに？
石上　ごめん、邪魔して。でも、そういうこと、やめたほうがいいよ。ここ、病院だし。

可奈　何が？
石上　じゃあね。

石上、半泣きで退室。

可奈　なに？

皐月、ジュースを持って戻ってくる。

皐月　可奈さん。石上先生、泣いてましたよ。どうしたんですか？
可奈　さあ。
皐月　（須藤を見て）え…？
可奈　あ。皐月ちゃん、この人！
皐月　え。
可奈　この人！
皐月　なんですか？
可奈　あれ？（皐月に小声で）メールの相手。
皐月　メール？　え？
可奈　メールの相手じゃないの？
皐月　誰がですか？
可奈　誰って。（須藤を見る）
皐月　意味がわからないんですけど。（ベッドに戻る）
可奈　…。（須藤に）ねえ。…あんた、誰？
須藤　えっ。…知らないで、助けたんですか？
可奈　思ってたのと違ってた。ごめん。
須藤　ええっ。あの…。
可奈　帰って！　人、呼ぶわよ！
須藤　は、はい。

須藤、退室。

皐月　可奈さん、なんですか、いまの人。
可奈　ごめんごめん。だってさ、さっき、この部屋を覗いてニヤーってしてたのね、それにこの病棟に若い男がいたら目立つじゃない？　てっきり皐月ちゃんのアレかと思っちゃった。久米先生に捕まったら大変じゃない？
皐月　アレって…。
可奈　不倫相手。

712号室に誠人だけ戻ってくる。

皐月　私、不倫とかしてませんから！
可奈　じゃあ、メールは？
皐月　メールは、ただの友達です。
可奈　男の？
皐月　可奈さん。
可奈　不倫相手じゃなかったら、なによー？
皐月　あの、マンガを読んでもいいですか？
可奈　ああ…どうぞどうぞ。
皐月　（マンガを読み始める）
可奈　あ…（ベッドに財布が落ちているのに気づく）
皐月　…。
可奈　（財布から名刺を見つける）あー！
皐月　なんですか…。
可奈　これ、あれよ。あれあれ。あれだって。
皐月　えっ？
可奈　ほら、これ。（名刺を渡す）さっきの男、財布、忘れていったみたい。
皐月　「TKS 探偵事務所　須藤司」…。
可奈　何を調べてるのかしら。不倫に探偵、偶然にしてはできすぎよね。
皐月　不倫じゃないです。
可奈　久米先生が雇ったんじゃないかしら？
皐月　自分で雇った探偵を、追い掛け回すわけないじゃないですか。
可奈　なかなかの推理ね。
皐月　石上先生じゃないんですか？
可奈　それはない。
皐月　どうしてですか？
可奈　あの人は自分で調べたい人だから、探偵なんかに頼らない。
皐月　じゃあ、私たちには関係ないですよ。
可奈　でもでも、この須藤さん、あなたの名前は知ってたよ。
皐月　え。
可奈　皐月ちゃんの名前言ったら「三木本皐月さんのことですか？」って言ってたよ。
皐月　ええ。じゃあ、誰が…。

ドアが開く（712号室）。
佐藤亜子が立っている。誠人の姿を確認して、またドアを閉める。誠人は気付かない。

可奈　どうしよう、この財布。
皐月　ナースステーションに届けた方が…。
可奈　久米先生に届けに行こうかな。
皐月　え。それは…。
可奈　あ、そうだ。これをエサにさっきの男、おびき寄せるってのはどう？

皐月　可奈さん…。
可奈　冗談よ。じゃあ、届けてくるわ。
皐月　それ、やりましょう。
可奈　えっ。
皐月　その財布、私が預かっちゃダメですか。
可奈　皐月ちゃんが？
皐月　その人、私のことが知りたいんですよね。
可奈　…気をつけるのよ。（財布を渡す）
皐月　ありがとうございます。
可奈　じゃあ、わたし、さっきの人、探してくるー。
皐月　あんまり無理しないでくださいね。
可奈　まかせてー。

可奈、出て行く。

皐月　まさか、誠人くんが…？（ケータイを操作しようとしてやめる）あの人、ケータイ見れない…。（ぐったり）

【712号室】
遊太がスポーツ新聞を持って入ってくる。

誠人　遊太さん。
遊太　（新聞を読みながら）なに？
誠人　皐月さん、何号室ですか？
遊太　さっき言ったでしょ。会うなら退院してからだって。
誠人　やっぱり心配だから。
遊太　皐月さんなら元気だよ。
誠人　じゃあ、なんで部屋番号も教えられないんですか？
遊太　ダメなものはダメなんだよ。
誠人　じゃあ、さっきの久米さんって人に聞いてきます。（外へ出て行こうとする）
遊太　えっ！？　待って待って待って。
誠人　なんですか。
遊太　それは、まずいでしょ。
誠人　なんでですか。
遊太　いや、どうしても。
誠人　まさか…！！
遊太　え、なに？
誠人　相当、悪いんですか？
遊太　え？
遊太　え。

誠人　実はさっき、そこで話してるの、ちゃんと聴こえたんです。告知しろとか、三木本さんは急性だったとか。急性ってことはかなり危険ですよね。まさかケッコンって血を吐いたですか！？
遊太　誠人くん…。
誠人　どうなんですか！？
遊太　…実はそうなんだよ！
誠人　やっぱり…。そんなに悪いんですか。
遊太　面会謝絶だって。
誠人　じゃあ、会ってきたっていうのは…。
遊太　…嘘だよ。君がショックを受けるんじゃないかと思って。
誠人　皐月さーん！
遊太　ごめんね、ウソ、ついちゃって。

片岡素子、入ってくる。

素子　失礼します。いま大きな声が聞こえましたが、なにかありましたか？
遊太　あ。
誠人　看護師さん。
素子　なんですか？
誠人　皐月さん、容態悪いんですか？
素子　え？
遊太　ちょっと、誠人くん！
誠人　遊太さんから面会謝絶だって聞きましたよ。
素子　え？（遊太を見る）
遊太　（目をそらす）
素子　…患者さんの容態を他人にお伝えするわけには…。
誠人　他人じゃありません。
素子　え？
誠人　ボクは皐月さんとお付き合いしているんです。
素子　え？　皐月さんと？
誠人　はい！
遊太　あ、あの、違うんです。彼はちょっと気が動転していて。
誠人　他人じゃないでしょ。
素子　そうですね。それが本当なら。
誠人　本人に確認してみてくださいよ。
素子　本人には確認しました。あなたのことは知らないそうです。
誠人　え…。
素子　ですからお知らせできません。
誠人　…そんな。（部屋を出ようとする）
素子　どちらへ？

誠人　トイレです。頭冷やしてきます。

誠人、出て行く。

遊太　誠人くん…。
素子　あの、彼は何者なんですか？
遊太　なんで俺に聞くの？
素子　設楽さん、仲がいいのでご存知かと。
遊太　いや、あの彼はその…。
素子　皐月さんとまったく無関係とも思えないんですが。
遊太　そうだよね。
素子　まさか彼の言うとおり…。
遊太　いや、それはない。それはないよ。
素子　お付き合いしていたのではないでしょうか。
遊太　それはないって！　付き合っていた？
素子　皐月さんの元カレでは。
遊太　え？
素子　それなら…辻褄があいます。
遊太　あうの？
素子　そうですよね？
遊太　…はい。モトカレです。
素子　最近まで付き合ってたんですか？
遊太　…三年位前かなあ。
素子　ずいぶん引きずっているんですね。皐月さんも、それで知らないふりを…。
遊太　誠人くん、かわいそうに…。
素子　そんなに好きなら、奪ってくれたらいいのに…。
遊太　え？
素子　（ポケットから誠人のケータイを取り出して、見つめる）

812号室の皐月、須藤の名刺を見て電話をかける。

皐月　須藤司さん。落し物が届いております。この留守電に気付かれましたら…812号室においでください。なお、できるだけ、人目につかないようにお願いいたします。

素子　あれ。
遊太　なに？
素子　なぜ昔付き合っていた二人が、ほぼ同時にホタテにあたって入院してるんですか？
遊太　え。
素子　偶然にしてはできすぎのような。
遊太　二人とも、うちのお客さんだからさ。

素子　え。
遊太　あんまり言いたくないんだけどね、どうもそのホタテ、うちがおまけで渡しちゃったやつらしくて。
素子　ああ。元々ふたりとも近所に住んでいて、同じ八百屋さんを利用されていたということですね。
遊太　はい。これ、内緒に…。
素子　わかりました。ありがとうございます。では、失礼します。

素子、出て行く。

遊太　誠人くん、大丈夫かな。

遊太、誠人を心配して出て行く。

【812号室】
久米、入ってくる。

久米　皐月。大変だ。
皐月　え、どうしたの？
久米　石上先生が813号室から出てこない。
皐月　えっ。どうして？
久米　わからない。どうも中で泣いてるらしい。ひどくショックを受けている様子だ。
皐月　大丈夫なの？　仕事中でしょ。
久米　先生は今日非番なんだ。
皐月　そうなの？
久米　おそらくあの不審者のせいだ。
皐月　不審者ってさっき言ってた？
久米　断片的に声が聞こえてくるんだ。「変な男、ベッド、可奈ちゃん」。
皐月　変な男、ベッド、可奈ちゃん。
久米　そう。可奈さんもいないんだ。いやな感じだろ。

須藤、ドアを開けるが、久米の姿を見て静かにドアを閉める。

皐月　ああ…。
久米　もしかしたら、皐月なら何か知ってるんじゃないかと思って。
皐月　わからないよ。
久米　そうか。一応聞いておこうと思っただけだから。
皐月　大変ね。昨日から寝てないでしょ？
久米　少しずつ仮眠を取ってるから大丈夫だ。
皐月　そう…。

久米　だから心配するな。
皐月　ずいぶん、イキイキしてるのね。
久米　え。
皐月　家でそういう顔してるところ、見たことないから。
久米　ああ…。すまん。
皐月　謝ってほしいわけじゃないんだけど。
久米　…。退院したら、休み合わせて温泉にでもいこうか。
皐月　遊園地がいい。
久米　わかった。あとで話そう。

【712号室】
誠人と遊太が戻ってくる。

遊太　誠人くん、女なんて幾らでもいるって。
誠人　…そんな簡単じゃないですよ。

812号室の久米、出て行く。

遊太　そうだけどね。
誠人　どうして知らないふりしたんだろう。
遊太　皐月さんは、誠人くんのことを知らないって言ったんだよ。そういうことじゃないか。男らしくあきらめなよ。
誠人　あれ…。
遊太　なに？
誠人　皐月さん、面会謝絶なんですよね。
遊太　うん。
誠人　あの看護師さん、いつそんな確認を取ったんですか？
遊太　ああ…。そういえば！
誠人　なにか勘違いしてるんじゃ。
遊太　いやいや、面会謝絶でも看護師と話ぐらいするでしょ。
誠人　しますか？　そんな容態でこういうプライベートな話。
遊太　いや、したから、言ってるんでしょ。
誠人　なにか隠してるんじゃないかな。
遊太　なにも隠してないよ。
誠人　なんでわかるんですか。
遊太　疑うほうがおかしいでしょ！
誠人　もう一度、八階に行ってみます。
遊太　いや、それはマズイ…。

誠人、部屋を出る。

遊太　やばいな…。どうしよう。

誠人、すぐ戻ってくる。ベッドに戻る。

遊太　あれ？

すぐに亜子がドアを開けて、入ってくる。
いくつかリンゴの入った買い物袋を持っている。

誠人　（亜子に背を向けて寝たふり）
亜子　（遊太の視線に気づいて）こんにちは。
遊太　こんにちは…。
亜子　（ナイフを取り出し、ぎこちなくリンゴを切り始める）
遊太　あの…。
亜子　あの、話しかけないでもらえますか？
遊太　は、はい。（所在なさげに見守る）
亜子　（リンゴを置いて、誠人の肩をつかんで無理やり自分のほうに向ける）
誠人　…亜子さん！　来てたんだ！
遊太　…？
亜子　なんで逃げたの？
誠人　逃げた？　気のせいだよ。
亜子　たしか八階って女の人専用のフロアでしょ。
誠人　間違えたんだよ。
亜子　まあ、いいわ。はい。あーん。
誠人　…？
亜子　あーん。（リンゴを食べさせる）
誠人　急になに…？
亜子　やっぱり。
誠人　え。
亜子　世の中の人はこんなことをして何が楽しいの？
誠人　さ、さあ。
亜子　…来なきゃよかった。
誠人　どうしてここが…。
亜子　何かお見舞い持ってこようかと思ったんだけど。
誠人　いいよ。
亜子　リンゴくらいしか思い浮かばなかった。お見舞いと言えば、リンゴかなって。
誠人　いや、もう退院するから。
亜子　よかった。
誠人　うん。

亜子　これから、あなた大変だろうし。（立ち上がる）
誠人　行くの？
亜子　うん。できるだけ裁判にはしたくないから。書面が届いたら、よろしくね。
遊太　あの…。
亜子　はい。
遊太　あの…聞くのがすごく怖いんですが、どちら様で？
亜子　失礼ですが？
遊太　あ、設楽と申します。誠人の友達みたいな。
亜子　そうですか。いつも主人がお世話になっております。
遊太　…やっぱり。
亜子　何か？
遊太　デジャブだ…。
亜子　なんですか？
遊太　いえ、なんでもないです。なんでもないです。
亜子　大丈夫ですか？
遊太　おかまいなく。いま、頭の中を整理していますから。
亜子　じゃあね…。
誠人　またね。

亜子、退室。

遊太　…ちょっと、どういうこと！？
誠人　なにが？
遊太　結婚してた？
誠人　…。姉です。
遊太　嘘でしょ。
誠人　嘘です。
遊太　なんで？
誠人　まさか、病院にまで来るとは。
遊太　皐月ちゃんと付き合ってたんじゃないの？
誠人　付き合ってましたよ。
遊太　じゃあ、でも、でも。
誠人　そういうことです。
遊太　それじゃ、さつきちゃんが可哀相！　可哀相じゃなかったよ！
誠人　え？
遊太　なんでもない！
誠人　わかってると思いますけど、家内には絶対内緒にしてくださいね。
遊太　当たり前だよ。
誠人　逆恨みになるかもしれませんが、もしもの時は、保健所職員としてできる限りのことはさせていただきます。

遊太　誠人くん、怖いよ。
誠人　浮気がバレたら、裁判で身ぐるみはがされる。きっとさつきさんにも慰謝料が…！
遊太　わかったけど、もうやめたほうがいいよ。こういうことは。
誠人　わかってますよ。
遊太　おとなしくしてればさ、もう退院できるわけだし。ね！
誠人　遊太さん、ボク、どうしたらいいですか？
遊太　何もしないで！　誠人くんが何もしなければ何も起こらないから。ね。
誠人　はい…。
遊太　ちょっと俺、行ってくる。
誠人　どこに行くんですか。
遊太　ちょっとね。そこにいて！　ステイ！　ね！

遊太、出て行く。

【812号室】
須藤、こそこそ入ってくる。

皐月　どうぞ。
須藤　あの…。
皐月　財布、忘れましたよね。（財布を見せる）
須藤　はい。どうも…。（取りに行こうとする）
皐月　それ以上近づいたら人呼びますよ。（ナースコールを見せて）
須藤　え。
皐月　TKS探偵事務所の須藤司さんですよね。
須藤　…はい。
皐月　わたしのことを調べてるんですよね。
須藤　いえ…そのようなことは。
皐月　誰に頼まれたの？
須藤　誤解です。別に、あなたのことを…。
皐月　言わないと財布返しませんよ。
須藤　何かの勘違いじゃ…。
皐月　呼びますよ。騒ぎますよ。
須藤　職務上、依頼者の名前を言うわけにはいかないのです。
皐月　私の調査ってことでいいのね。
須藤　…。
皐月　誰に頼まれたの？
須藤　参りましたね。では、はっきり言いますが、確かに私は、あなたの交際関係を調査しております。あなたが知られたくないことも沢山知っています。
皐月　…脅してるの？
須藤　取引したいですよ。わたしもコトを大げさにしたくないんです。依頼者は言えませ

んが、察してください。あなたがお付き合いしている人の配偶者です。

皐月　…私がお付き合いしている人の配偶者は私ですけど。

須藤　…他にもいるだろ！

皐月　なんですか？

須藤　なんでもありません。

皐月　別に返さないなんて言ってないんですよ。誰の依頼か聞いてるだけじゃない。

須藤　それが言えないんですよ。

皐月　平行線ね。

須藤　では、財布とこれを交換してください。

須藤、皐月に写真を渡す。

皐月　…！

須藤　八百屋で、ふたり仲良く春菊を値切っているところです。

皐月　そ、そうね…。

須藤　何も知らなければ仲睦ましい男女の写真です。しかし、とてもご主人には見せられません。この写真と、わたしの財布を交換しましょう。

皐月　…卑怯者。

財布と写真を交換する。

須藤　私はね、職業柄こういう修羅場を沢山潜り抜けてきたんですよ。（勝ち誇って）同室の方にはお菓子、ご馳走様でしたとお伝えください。（ドアを開け、廊下で）それでは、さようなら。

須藤、言い終わる前に、廊下の久米にタックルされ、がっちり取り押さえられる。

久米　やっと捕まえたぞ、この！

須藤　痛い。痛い…。

皐月　えっ！

久米　皐月、無事か！　…無事か！

皐月　…うん。

久米　おまえ、石上先生や可奈さんに何をしたんだ！

須藤　痛い。痛いです…。

久米　よし…洗いざらい何があったか話してもらうからな。（無理やり立たせる）

須藤　痛い…。痛いです…。

久米、須藤を連行して立ち去る。

皐月　（呆然）…やられた。

遊太、入ってくる。

遊太　皐月さん。
皐月　…。
遊太　皐月さん！
皐月　ああ。
遊太　どうしたの？
皐月　やられた。
遊太　何が？
皐月　私の浮気調査をしていた探偵が、あの人に捕まった。
遊太　あの人って久米さん？
皐月　…。（写真を見せる）
遊太　ああ、これはヤバイね。でも、探偵なら、そう簡単に秘密もらさないでしょ。
皐月　だといいけど…。あの人のことだから、結構無茶すると思う。
遊太　ああ…。
皐月　それで、なんですか…？
遊太　色々あったから伝えておかなきゃって。
皐月　うん。
遊太　片岡ちゃんて看護師知ってる？
皐月　うん。
遊太　あの人、誠人くんのことを、皐月さんの元カレだと思っているから。
皐月　なんで？
遊太　成り行き。三年前まで付き合ってたことになってる。
皐月　三年？
遊太　あと、石上先生。
皐月　うん。
遊太　先生は、誠人くんが皐月さんに一方的にあこがれていると思っている。
皐月　は？
遊太　たぶん大丈夫だと思うけど、なにか聞かれたら口裏合わせておいてね。
皐月　…つまり、こういうことですか？　誠人くんにとっての私は…、片岡さんだと元カノ、石上先生だとお付き合いする前、久米にいたっては知り合ってすらいないってことですか？
遊太　さすが、理解が早いね。
皐月　わけわかんない！
遊太　やっぱり？
皐月　どうして…。
遊太　みんな勝手に勘違いするんだよなあ。
皐月　こんなことなら、面会謝絶にして誰にもあわないようにしたい。
遊太　あ、それもあった。誠人くんは皐月さんが重病で面会謝絶だと思ってるから。

皐月　…。それで全部？
遊太　…たぶん。
皐月　要するにお互い、退院まであんまり出歩かなければいいってことかな。
遊太　そうだね。
皐月　あとはあの探偵…。
遊太　とりあえず、俺からはこれだけだから。
皐月　他にはないですね？
遊太　なんか忘れてるような気がするけど…。思い出したら、また来るわ。じゃあ。
皐月　ありがとうございます…。

遊太、出て行く。

【712号室】
素子、入ってくる。
（素子と誠人の会話の間に、皐月が部屋を出て行く）

素子　佐藤さん。今よろしいですか？　…佐藤さん？
誠人　はい…。
素子　あの、やはりよくないと思いますので、お話します。三木本皐月さんのことです。
誠人　なんですか？
素子　…彼女は、面会謝絶ではありません。
誠人　え。
素子　たしかに最初は苦しんでいらっしゃいましたけど、今は元気ですよ。
誠人　ウソだ。
素子　本当です。
誠人　…それなら、皐月さんに会わせてくださいよ。
素子　それは…できません。
誠人　でしょう？
素子　ただ、それは彼女が面会謝絶だからではありません。
誠人　じゃあ、どうしてですか
素子　三木本さんは、もう結婚されているんです。ですから会わせるわけには…。
誠人　…もっとマシな言い訳はないんですか。
素子　えっ。
誠人　そういうウソはよくないですよ。
素子　ウソじゃありません。
誠人　石上先生や遊太さんに聞いてますから。
素子　信じたくない気持ちはわかります。でも、既婚者に片思いするのは不毛です。私には、わかるんです。
誠人　とにかく、皐月さんと実際に会えるまで、絶対信じませんから。
素子　佐藤さん…。

久米が入ってくる。

久米　失礼します。
素子　え。
久米　ちょっといいですか。確認したいことがあるんですが…。
誠人　なんですか？
久米　あの…石上先生はわかりますか？
誠人　はい。
久米　先生が気になることを言っていたので、確認を。
素子　先生は、813号室に引きこもってるんじゃ。
久米　引きこもる前だよ。
誠人　なんですか？
久米　先生の言っていたことをそのまま言います。「八階には、佐藤さんが憧れている人がいる」これって本当ですか。
誠人　憧れっていうかなんていうか。
久米　いるんですね。
誠人　ええ、まあ。
素子　あの、大丈夫ですか、そんな話をして？
久米　いや、ただの確認だから。
素子　ほんとうですか？
久米　率直に伺います。あなたのあこがれている人は、
素子　あのっ。
久米　津村可奈さんではありませんか？

可奈、ちょうど売店で買ったから揚げを食いながら812号室に戻ってくる。

素子　えっ？
久米　八階の三十代の女性で未婚といえば、あの人しかいません。差し支えなければ教えていただきたい。
誠人　いや、ちょっと意味がわからないんですけど。
素子　あの、何が言いたいんですか。
久米　あそこでなにが起きたか知りたいんです。可奈さんはいないし、石上先生は引きこもってしまった。その先生の言葉が、「変な男、ベッド、可奈ちゃん」。
誠人　あの、やっぱり意味がわからないんですけど。
久米　つまり可奈さんをベッドで…いや、可奈さんのお相手はあなたではないかと。
誠人　は？
久米　違っていたらすみません。でも、やはりあなたしかいない。あなた、八百屋さんについていくフリして、可奈さんの病室を確認された。違いますか。
誠人　あの…可奈さんって…？

久米　八階で唯一の三十代独身女性です。
素子　あの…
久米　なんですか？
素子　なんか、別の不審者を捕まえたって聞きましたけど、その人じゃないんですか。
久米　さっき主任から大目玉を食らったところだ。
素子　ええ？
久米　見た目で不審者だと決め付けるなって。
素子　久米さん…。
久米　どうなんですか？
誠人　ええっ。
久米　ダメだと言っているわけじゃないんです。可奈さんは一応独身ですから。ただ、どういう状況なのかを確認しておきたいんです。私の患者さんですから。
誠人　ぼく、その人、知りません。
久米　だけど、八階で他に独身の方なんて…。まさか、もっと年上…？
誠人　なんかすごく勘違いされてませんか？
久米　というと？
誠人　僕の付き合ってる人は、面会謝絶でそれどころじゃありません。
久米　え…。
誠人　だから、僕は関係ありません。
久米　面会謝絶…？　そんな人、八階にいませんよ。
誠人　いますよ！
久米　あ！　…いた。
素子　え？
誠人　ほら！
久米　ただ…。（素子に）知らないのか。
素子　なにをですか？
久米　言ってないのか。
素子　え？
久米　その人のこと！
素子　その人って…？
久米　もういい。こういうことは早く知っておいたほうがいい。
素子　え？
誠人　…なんですか？
久米　いいですか？　彼女は昨晩、お亡くなりになっています。
誠人　え…！
素子　違います、さっき彼女には会ってきましたから。生きてます。
誠人　そりゃ部屋番号も教えられない筈だ…。
久米　私たちも全力を尽くしたのですが…。
素子　久米さん！
久米　いずれわかることだから。

誠人　（部屋の外へ向かう）僕のせいで…。
久米　いや、あなたのせいではないですよ。
素子　久米さん。
素子　佐藤さん！
誠人　大丈夫ですから。
素子　本当ですか？
久米　いや、少しそっとしておいてあげよう。

誠人、部屋を出て行く。

誠人の声　さつきさーん！
久米　え？
素子　久米さん、何てこと言うんですか？
久米　なんでいま、皐月って…。
素子　わたし、見てきますから。久米さんは仕事に戻ってください。
久米　ちょっと待って。
素子　なんですか。
久米　片岡さん、八階のこと、何か知ってるのか。
素子　久米さんは知らない方がいいですよ。
久米　どういうことだ？
素子　ほんとうに知りたいんですか？
久米　え。知りたいけど。
素子　（ポケットから誠人の携帯電話を出して久米に渡す）…見たらどうですか。パスワード解除しましたから。
久米　え。
素子　私は佐藤さんの様子を見てきます。

素子、出て行く。
久米、首をひねりながら出て行く。

【812号室】
皐月、入ってくる。

皐月　あ、可奈さん。どこ行ってたんですか？
可奈　うん。カラアゲ買ってきた。
皐月　ほんとに買ってきたんですか？
可奈　うん。食べる？
皐月　すみません。点滴取れたばっかりなので、あんまり脂っこいものは…。
可奈　ああ。そっか、そうよね。あ、そうだ。財布はどうなったの、探偵の？
皐月　実は、その探偵が夫に捕まってしまいました。

可奈　え。…大丈夫なの？
皐月　大丈夫です、たぶん。
可奈　ホントに？　ねえ、ホントに大丈夫なの？　ねえ。
皐月　それもありますけど可奈さん。
可奈　なに。
皐月　石上先生、ショックで隣の部屋に閉じこもっちゃいましたよ。
可奈　なんで？
皐月　わかりませんけど、「変な男、ベッド、可奈ちゃん」らしいです。
可奈　なにそれ。
皐月　可奈さん、変な男に襲われたんじゃないかって旦那も心配してましたけど。
可奈　…ああ！
皐月　なんですか？
可奈　あの探偵と浮気してたと思ったのかな。
皐月　え。
可奈　探偵をベッドにかくまってるところ、見られたから…。
皐月　決定的じゃないですか！　なんで、そのとき気付かなかったんですか。
可奈　だって、そんな風に取られるなんて！
皐月　取られるに決まってるじゃないですか。
可奈　あ、そうかあ。どうしよう。謝る？　どう思う？
皐月　どうって。別にいいんじゃないですか。可奈さん、石上先生のこと、なんとも思ってないんでしょう？
可奈　なんとも思ってないけど、かわいそうじゃない。
皐月　なんとも思ってないならいいと思いますけど。
可奈　だけどね。わかんないかなあ。
皐月　じゃあ、ヨリを戻しましょうとか言ってあげたらいいんじゃないですか。大喜びですよ、きっと。
可奈　そんなに簡単じゃないのよ。
皐月　そうですか？
可奈　こういうことはよっぽどのキッカケがないと…。

廊下から誠人の「さつきさん」と呼ぶ声。

可奈　なに？
皐月　なにか聴こえた。
誠人の声　（少し声が大きくなって）さつきさん…！
皐月　まさか、この声。
可奈　なに？
誠人の声　（更に大きな声で）　さつきさん、さ…。
皐月　え？
可奈　え？

少し間があって半分ドアが開く。須藤が立っている。

須藤　（動揺）あの、えっと。あの…！
皐月　なに？　何しにきたの？
須藤　ここに、あの！
皐月　なに！
須藤　人が、っていうか。あの！
可奈　なによ？

ドアを全開すると須藤の体にしがみついている誠人の姿。

皐月　…！
誠人　（皐月に気づいていない）皐月さん…。
須藤　あの、どうしたら、俺。
可奈　とりあえず、中に入れて。ベッドに寝かせて。
須藤　はい。
皐月　いや、あの、誰か呼んだ方が。
可奈　とにかく、しょうがないから寝かせましょう。
須藤　はい。
皐月　いや…。

須藤、誠人に肩を貸しながら、部屋の奥のベッド（上手手前）。
誠人は時々、咳き込んだり、震えたりしながら、ベッドに横になる。

可奈　ナースコールした？
皐月　あ、いま！

片岡素子が入ってくる。

素子　大丈夫ですか？
可奈　病室の前で倒れかけてた。
素子　…佐藤さん。佐藤さん。
誠人　…苦しい。
皐月　あの、彼、どうしたの？
素子　あの、…さっき病室でショックを受けるようなことを言われて…。
皐月　それだけでこんなに？
素子　わかりません。なにか持病があったのかも。
須藤　私は、失礼します…。

須藤、出て行く。

可奈　あの！
素子　なにか？
可奈　（ちょっと嬉しそうに）石上を呼んでくる？！
素子　お願いします。
可奈　まかせて！

可奈、出ていく。

誠人　（せきこむ）
素子　佐藤さん、佐藤さん。
誠人　皐月さん…。
素子　あ。皐月さん。
皐月　はい？
素子　すみませんが、彼に声をかけてもらっていいですか？
皐月　わたしが？　なんで？
素子　佐藤さん、皐月さんが死んでしまったと思いこんでいるんです。
皐月　なんで？
素子　誤解が重なってしまって。顔を見れば少しは落ち着くかと。
皐月　む、昔のお付き合いだからね。
素子　知ってます。はやくしてください。
皐月　…誠人くん！
誠人　…皐月さん。
皐月　どうしたの？
誠人　ぼく、もう死んじゃったの？
皐月　誰も死んでないから！
誠人　（咳き込む）…よかった。本当に心配したんだよ。
皐月　さっぱりわかんないけど、心配かけてごめんね。
素子　皐月さん…。
皐月　なに？
素子　私、とんでもないことを…。
皐月　え？
素子　実は、佐藤さんのケータイを見てしまいました。
皐月　え…。
素子　そして、そのケータイを久米さんに渡してしまいました。
皐月　ええっ！　なんで。
素子　ごめんなさい。でも！
皐月　それで、久米は？
素子　え。

皐月　久米はどこ？
素子　怒らないんですか？
皐月　それは、あと！　あの人が来たら、（誠人を指差して）こんなんじゃすまないよ！！
素子　…自分の仕事に戻ってもらうよう伝えましたが、

久米、入ってくる。

二人　（久米を見てあとずさる）
久米　どうした？
皐月　えっと。あの…。
誠人　（うめく）
久米　佐藤さん。苦しそうじゃないか。なにボーっとしてるんだ。
素子　えっ。
久米　先生は呼んだのか。
素子　可奈さんが石上先生を呼びに行ってます。
久米　そうか。佐藤さん、わかりますか。今、先生呼びましたから、少しのガマンですよ。
皐月　ねえ。
久米　なんだ？
皐月　大丈夫なの？
久米　なにが？
皐月　なにがって…。怒ってないの？
久米　なに言ってるんだ。いまは目の前の患者だろ！
素子　久米さん。
皐月　冷静だ！
可奈の声　ちょっとー、ねえったら。急患だって。出てきなさいよ！
皐月　大丈夫なの？
素子　ちょっと見てきます。
可奈の声　さっきのはさー。誤解だって。信じてよー。出てきてくれたら、ヨリを、ヨリを戻しても…（咳き込む）
石上の声　可奈ちゃん！　可奈ちゃーん！

ちょっと沈黙があって、可奈の肩を抱いて石上が入ってくる。

石上　私を呼んだか！
久米　先生！
皐月　可奈さん！
可奈　なりゆきだからね、なりゆき。
久米　先生。
石上　…なになに、どれどれ？　あれ、八階の不審者くんじゃないの。またこっち来ちゃったんだ。

可奈　すぐそこに倒れていたのよ。
石上　会いたかったのはわかるけどさ。
誠人　すみません。
石上　検査でなんともなかったんじゃなかったっけ？
素子　そうなんですが…。
石上　心臓？　貧血？　蕁麻疹が出てるな。アトピーっぽいけど、何かあったの？
素子　あの…いろいろあって皐月さんが死んじゃったと思い込んゃったんです。
石上　どんな色々があれば、そうなるんだよ。
素子　久米さんが…。
石上　それで、ショックで蕁麻疹出してぶっ倒れたってこと？

亜子が入ってくる（まだリンゴの袋を持っている）。
横に須藤。

亜子　失礼します。
素子　あの、すみません。いまはちょっと。
亜子　身内の者です。
素子　え？
亜子　（皐月に）あなたが春菊の彼女ね。
皐月　えっ。なんですか？
亜子　安心してね。あんな写真、裁判じゃ何の証拠にもならないから。（須藤に）ね。
須藤　すみません…。
皐月　あの、あなたは？
須藤　この人は、あなたがおつきあいしている人の配偶者だ！
皐月　えっ。それは私じゃないの？
亜子　（誠人に）私がお見舞いに来たこと、そんなにショックだったの？
皐月　あ！　それ！
亜子　なに？
皐月　それ、食べさせたんですか？
亜子　そうよ。
皐月　どうして…。
亜子　お見舞いといえばリンゴでしょ。
皐月　誠人くんはバラ科のアレルギーなんです！
亜子　だから何？
皐月　だから、リンゴ、バラ科！
石上　え、じゃあ、アナフィラキシーなの？
素子　そんな、幼児じゃあるまいし。
石上　珍しいっていうか、成人男性じゃありえねえだろ。
皐月　誠人君、ほんとダメなんです。ちょっと前にも発作をおこしたばかりで…。
亜子　え？

石上　食べたのはどのくらい前？
亜子　十分くらい前ですけど。
石上　じゃあ、久米くん、アドレナリンと一応ステロイドを準備してくれる？　もうちょっとがまんしてね。呼吸できる？　ゆっくりね、できるだけ、力抜いてね。
久米　さつき…。
皐月　なに？
久米　どうしてこの人のアレルゲンなんか知ってるんだ。
皐月　え。
久米　答えろ！　どうしてだ？
皐月　え、なんで今頃キレてるの。
石上　久米君、早く。
久米　皐月！　俺が夫じゃそんなに不満か。
石上　もういい。じゃあ、片岡さん。頼むよ。
素子　久米さん。さっき渡したケータイ、見てないんですか。
石上　おい！
久米　ケータイ、これのことか。見てないよ。
素子　見てなかったんですか？
久米　どうして俺が片岡さんのケータイを見なきゃいけないんだ。（ケータイを返す）
素子　私のじゃないのに。

遊太、駆け込んでくる。

遊太　思い出したよ！　誠人くん、アレルギーなのにリンゴを食わされて…。あ、あれ？
皐月　もう遅いよ。
誠人　…ちょっと待って。
亜子　あの。主人が何か言おうとしてます。
誠人　皐月さんを責めないであげてください。皐月さん、さびしかったんです。結婚してからずっと…。
遊太　誠人くん、いつ皐月さんが結婚してるって…。
誠人　これだけ色んなことを周りで言ってたら、どんな末期の患者でもわかります！
素子　え、お二人はご夫婦なんですか？
亜子　そうですが。
皐月　誠人君…。
誠人　うん。
皐月　（怒）結婚してた？！
誠人　…。
遊太　いや、彼も悩んで…。
久米　皐月、俺の話が終わってないぞ。
石上　はやく薬取ってきてよ。仕事しろよ！
素子　私、行ってきます。

皐月　（誠人に）どうなの？　私をだましたの？　一年も。
遊太　ええっ、皐月さん、お互いさま…。
誠人　うう…。
皐月　（無言でイスを手にして殴りかかる）苦しそうな振りしてるんじゃねえよ！　こら！

椅子を振りかぶる皐月は、久米のときと同じフォーム。
スローモーションになってみんなで皐月をとめようとする。
暗転。

【712号室】
数時間後の病室。

亜子　自分のアレルギー知ってたんでしょ。
誠人　…うん。
亜子　どうして食べたの？　そんなに怖かった？
誠人　いや。ああいうことをすれば、結婚したときの気持ちを思い出せるかもしれないと思ったから。
亜子　なにやってもダメなのね。私たち。
誠人　うん。
亜子　でも、これでお互いらくラクになれるんじゃない？
誠人　…そうかもね。
亜子　お大事に。慰謝料の件は考えておくわ。

亜子、部屋を出て行く。

【812号室】
皐月のそばで無言の久米。

皐月　言いたいことがあったら言ったら。一応病人なんだけど、私。
久米　あんなに凶暴な病人はいない。
皐月　…別れる？
久米　それは、イヤだ。
皐月　あそう。
久米　でも、どうしたらいいんだ。俺は。
皐月　簡単なんだけどね。
久米　え。
皐月　仕事に向ける熱意の十分の一でいいから私に向けてよ。
久米　…皐月。
皐月　結婚したからって安心しないで。
久米　いつになったら俺はラクになれるんだ？

皐月　ラクしたいの？
久米　…。そんなことないよ…！
皐月　（久米を見つめて）私と結婚したことを後悔してる？
久米　ああ、出会わなければよかった。

久米、ベッドに腰掛けてカーテンを閉じる。
音楽。暗転。

（終わり）